

「更級日記」〈初瀬〉の冒頭の一節

5 そのかへる年の十月二十五日、大嘗会だいじやうえの御禊ごけいとのしるに、初瀬はつせの精進さうじはじめて、その日京いを出づるに、さるべき人々、「二代に一度みちゆの見物みものにて、田舎いなかせかいの人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でていかむも、いとものぐるほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」など、

5 はらからなる人はいひ腹立てど、ちごどもの親なる人は、「いかにいかににも、心にこそあらめ」とて、いふにしたがひて、出だし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いといみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかる折まがひに詣まうでむ志を、さりともおぼしなむ。かならず仏ぶつの御しるしを見む」と思ひ立ちて、その晝ひるに京を出づるに、二条の大路にじょうをしも、わたりていくに、さきに御あかし持たせ、ともの人人浄衣じやうえ姿なるを、

15 5 そこら、棧敷せきぢきどもにうつるとて、いぎちがふ馬も車も徒歩ちちびと人も、「あれはなぞ、あれはなぞ」と、やすからずいひおどろき、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。良頼りやうのりの兵衛督ひやうゑのくみと申しし人の家の前を過ぐれば、それ棧敷へわたりたまふなるべし、門広うおしあけて、人々立てるが、「あれは物詣人なめりな。月日しもこそ世におほかれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし、物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」とまめやかにいふ人ひとりぞある。

注 大嘗会の御禊——大嘗会は天皇即位後はじめて行かう新嘗祭、一世一代の大札。御禊はその大嘗

会に先立ち、天皇が河水で御身をきよめる儀式。

初瀬の精進——長谷寺に参詣するためにあらかじめ行かう精進。

ちごどもの親なるひと——筆者の夫。

浄衣——潔斎のときに着用する白い装束。

●重要単語

●古文常識

- 41 ののしる
- 153 大嘗会
- 161 さるべき
- 22 はらから
- 141 いと
- 106 あはれなり
- 110 ゆかし
- 108 いみじ
- 110 同ゆかしげなり「形動」
- 92 いとほし
- 159 かかり
- 158 さり
- 135 参まさりとも(p171)
- 13 しるし
- 112 わたる
- 20' そこら
- 36 かし
- 135 なぞ
- 79 おどろく
- 38' あさむ
- 228' よしなし
- 95' まめやかなり

*数字は、『マドンナ古文単語23』『マドンナ古文常識217』(学研)の通し番号です。ダッシュ(、)は関連語です。

【現代語訳】

その翌年(永承元年＝一〇四六年)の陰曆十月二十五日、(後冷泉天皇ご即位の)大嘗会の御禊といって世間が大騒ぎしているのに、(わたしは)初瀬参詣のための精進を始めて、その(大嘗会の御禊の)当日に京を出発することにすると、(後見役として)ふざわしい人々(＝兄弟)が、「天皇御一代に一度だけの見物であつて、田舎に住む人でさえ見物するのに、月も日もたぐさんあるうに、わざわざその日に京をふり捨てて出て行くうとするのも、たいへん狂気じみていて、後々まで物笑いの語りぐさともきつとなるにちがいないことである」などと、兄弟にあたる人は息巻いて反対したけれど、幼子たちの親である人(＝夫の橘俊通)は、「どうともこうとも、お前の心しだいであろう」と言つて、(わたしが)言うとおりにして、出発させてくれた気持ちほしみじみうれしいことだ。わたしの供をして行く人々も、たいへん御禊を見たがつている様子であるのは、気の毒であるけれど、「見物して何になるうか、何にもならない。こういうときに参詣する真心を、そうは言つても仏様はきつと感じてくださるであろう。必ず仏様のご利益もあらわれるだろう」と決心して、その日の明け方に京を出たが、(御禊の行列の筋道に当たる)二条の大路を、通つていくと、先頭の者に(仏様に供える)お灯明を持たせ、供の人々も浄衣姿である我々一行を(見咎めて)、大勢の人々が、棧敷など(＝見物席)に移動しようとして、あちらこちら行き違う馬上の人も車の人も徒歩の人も、「あ

れは何だ、あれは何だ」と、不安がつて言い驚き、あきれたように笑い、嘲ける者たちもいる。良頼の兵衛の督と申しあげた方の家の前を通り過ぎると、その方が棧敷へお移りになるのであろう、門を広く開けて、人々が立っている(その人々)が、「あれは参詣人であるようだな。(今日でなくても)物語に適当な月日はこの世にたくさんあるのに」と笑う中に、何という思慮深い人であろうか、「(御禊見物に)一時だけ目を楽しませて何になろうか、何にもならない。たいへんすばらしく発心なさつて、仏様の御利益を必ずお受けになるにちがいない人であるようだ。(大嘗会の御禊に浮かれ騒ぐとは)つまらないことよ、見物などしないで、こういうふうに(物語を)思い立つほうがよかつたのだ」とまじめに言う人が一人だけいる。